

提言

「地方創生」の先進地から

秋田を見つめる

公立塾・おさきのくに 隠岐国学習センター 秋元悠史（平成17卒）

島根県松江市の北60キロに浮かぶ隠岐諸島の一つ海士町。本土からフェリーで約3時間半かかる人口2400人足らずのこの島には、年間2千人を超える視察者が訪れる。昨年の安倍首相の所信表明演説により、「地方創生」の先進事例として注目を集めた島の港で来島者を出迎えるのは、「ないものはない」と書かれたポスター。役場の若手職員が考案し、「あきたびじょん」を手がけた梅原真氏がデザインを担当した、海士のキャッチコピーだ。

ないものはない、のポスターが島外の人を出迎える（海士町キンニヤモニヤセンター）

このコピーには二つの意味が込められている。「なくてよい」。大事なものはずべてここにある。足元の暮らしにこそ向き合おうというわきまを、清濁みな併せ呑みこの島で生きていこうという覚悟が感じられる、海士らしさを見事に言い表した言葉だと思ふ。

そのわきまを覚悟は、海士町が積み重ねてきた「地方創生」の実践にも垣間見える。公共事業の削減により町としての存続が危ぶまれる中、安易な合併ではなく単独町政の道を選び、町長や役場職員は自らの給与カットを断行。「日本一安い給料で日本一働く公務員」たちは「ものづくり」と「ひとづくり」に注力し、「岩がき春香」、「隠岐牛」、「さざえカレー」など独自のブランドを次々と生み出してきた。

島唯一の高校・県立隠岐島前高校は、地域と一体となつて「隠岐島前高校魅力化プロジェクト」を立ち上げ、島をフィールドにした教育の場づくりを推進。今や全校生徒の約半数が島を除く全国各地から集まる稀有な学校となった。

多様な背景をもつ移住者をはじめ外部の力も取り入れながら、その取り組みに通底するのは常に「島にあるもの／いる人」だ。ちょうど10年前に秋田という田舎が嫌になり上京したはずが、気づけば秋田にいつか戻ることが一つの目標となっていた。「海士は修行の地です。将来は秋田に帰ります」。面接という場面でも空気を読まなかった教育業界未経験の若僧は、幸運にも公立の塾のスタッフとして島の高校生たちと日々を過ごすこととなる。

修行先である海士の日常は、しがらみの中でも歩みを止めないプロジェクトのダイナミズムと、高校生たちのエネルギーのおかげで刺激が尽きない。地元住民はもちろん、移住者や島外からの来客など多様な人と交流を重ね、日々成長していく生徒たちと接していると、教える／教えられるという立場を越え、生徒によって自分の思いがけない側面が引き出されることさえある。子ども・大人問わずこうした関係性が築けるのだから、この島は面白い。

Profile



あきもと・ゆうし／1986年、大仙市生まれ。2009年に都内IT企業に新卒で入社後、約1年半で退職し、島根県の離島・海士町へ移住。統廃合の危機に直面していた島の高校を舞台とした「隠岐島前高校魅力化プロジェクト」に隠岐国学習センターのスタッフとして参画。2015年3月には同プロジェクトの軌跡をまとめた書籍『未来を変えた島の学校』（岩波書店）が出版されている。
<http://yakimoto.me>

「多様な背景をもつ移住者をはじめ外部の力も取り入れながら、その取り組みに通底するのは常に「島にあるもの／いる人」だ。ちょうど10年前に秋田という田舎が嫌になり上京したはずが、気づけば秋田にいつか戻ることが一つの目標となっていた。「海士は修行の地です。将来は秋田に帰ります」。面接という場面でも空気を読まなかった教育業界未経験の若僧は、幸運にも公立の塾のスタッフとして島の高校生たちと日々を過ごすこととなる。

「秋田で働きたい」と話し、大学に通う卒業生たちは長期休暇中に約30人の学生を集めて島に戻り、母校の後輩のために出前授業をする。好循環の兆しだ。

翻って秋田を見れば、まだまだ余白がそこら中にある。小さな島にだってできたことは幾らでもあった。この余白を存分に生かさないう手はない。

秋田で仲間たちが育んできたものも芽を出しつつある。思えば海士との縁ももたらしたのも秋高の同期だった。この修行を終えた後には、この仲間たちとの縁をしっかりと秋田の未来に繋いでいきたい、そう思っている。

天上天下

TENJO TENGE

明治時代の校友に、石井祐治（俳号露月）という、当時の俳壇トップの正岡子規と親交を結んでいた俳人がいる。筆者は昨年、地元雄和出身の露月研究家、伊藤義一氏の力作『俳人露月 天地蒼々』を読み深い感銘を受けた。露月は秋田中学で学んだが、病気のため3年終了時に中退している。同窓会名簿に名前がないのは残念である。雄和町女米木の出身で、持病と闘いながらも俳人としての大成を夢見て、上京と帰郷を繰り返した。その間、数多く催された句会の選評を見ると、正岡子規の評価と期待の高さがうかがえる。だが、彼は持病のため東京で長く生活するのは難しいと判断し、田舎で暮らしていくため医師になることを決意する。西洋医学を習得した医師のいない郷里で、生家で医院を開業した。大変な努力の結果であった。露月家では長男菊夫氏、次男元次氏ともに秋田中学で学んでいて、母校との因縁の深さを感じる。石井露月顕彰全国俳句大会などが開催されているのは承知しているが、この鬼才が学んだ母校として、何らかの形で顕彰できないものだろうか。